

遠近の回想

レイネ=ストローネ=エリボン著



フランス構造人類学のセトランのちに並べ
 巨匠レイネ=ストローネで構想を練ると、神話
 が、10年の人生と字間的思考と音楽とは本質的
 をより返った回想のインに類似しているため、神
 タクエ。聞き手は「話のなかにどうアガッ
 ー」一巻で「まじまじの」ナタという形式が見つ
 批評家エリボンは、絶妙かると……。こうした
 彼女の向けに、この構想を纏ひていながら、
 有ら思想家も心を開き、初期の親族研究からなせ
 ユダヤとしての生い立、彼が神話研究の方向に進
 ちる学校時代、友人たち
 どの交流から神話研究の
 秘密に至るまで、すべて
 を直に語り下ろした。
 自伝的エッセイ「悲し
 き熱帯」(一九五五)で
 レイネ=ストローネは、
 構造主義というものの見
 方を紹介し、世界に新鮮
 な衝撃を与えた。だが彼
 遠近の回想

神話研究の秘密から友人交流まで

フランス構造人類学のセトランのちに並べ
 巨匠レイネ=ストローネで構想を練ると、神話
 が、10年の人生と字間的思考と音楽とは本質的
 をより返った回想のインに類似しているため、神
 タクエ。聞き手は「話のなかにどうアガッ
 ー」一巻で「まじまじの」ナタという形式が見つ
 批評家エリボンは、絶妙かると……。こうした
 彼女の向けに、この構想を纏ひていながら、
 有ら思想家も心を開き、初期の親族研究からなせ
 ユダヤとしての生い立、彼が神話研究の方向に進
 ちる学校時代、友人たち
 どの交流から神話研究の
 秘密に至るまで、すべて
 を直に語り下ろした。
 自伝的エッセイ「悲し
 き熱帯」(一九五五)で
 レイネ=ストローネは、
 構造主義というものの見
 方を紹介し、世界に新鮮
 な衝撃を与えた。だが彼
 遠近の回想

1992年(平成4年)1月12日(日曜日)

読書

【第三種郵便物認可】

Book Review

ミシェル・フーコー伝

D・エリボン著

稀有な知性の素顔伝える

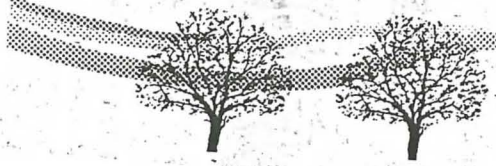
フランスの生んだ超一流の哲学者
 著ミシェル・フーコーの、待望久
 しい伝記の翻訳である。死後七年
 あたり、神秘のベールに隠されて
 きた彼の素顔が、この一冊で明ら
 かにされた。

著者は晩年のシャールリス
 ト・フーコーの膨大な原稿類を統
 破したのはもちろん、埋もれた資
 料を数多く発掘、何百人もの関係
 者に取材するなど徹底した調査を
 重ねた。サルトル・ラカン・バルト、
 ドゥルーズ・ブルドゥーなどの知
 識人たちが構造主義の台頭やフー
 コーの系譜学の隆盛をどのように
 支えたのかを、大学人事の裏事情
 や手紙のやりとりといったレベル
 で追体験できるのは驚きである。
 フーコー研究に欠けていたこの重要
 基本書となるに違いない。

また、知られることの少なかつ
 たフーコーのもっとも顕れた
 とえば国外での生活が、70
 年代の刑務所改革運動、過激派と
 の接近、イラン革命やポर्टレ
 プルへの関心などについて、十
 分ページがさかかっている。そして
 同性愛。若い頃、彼はこの悩みに
 精神の安定を失って、精神医学と
 出合った。そして、出世作『狂気
 の歴史』を著し、『監獄の誕生』
 など話題作を書きついで、ライ
 フタイム『性現象の歴史』を構想す
 る。アメリカでエイズに感染し、
 命を落すことになったのも、同
 性愛のためだった。

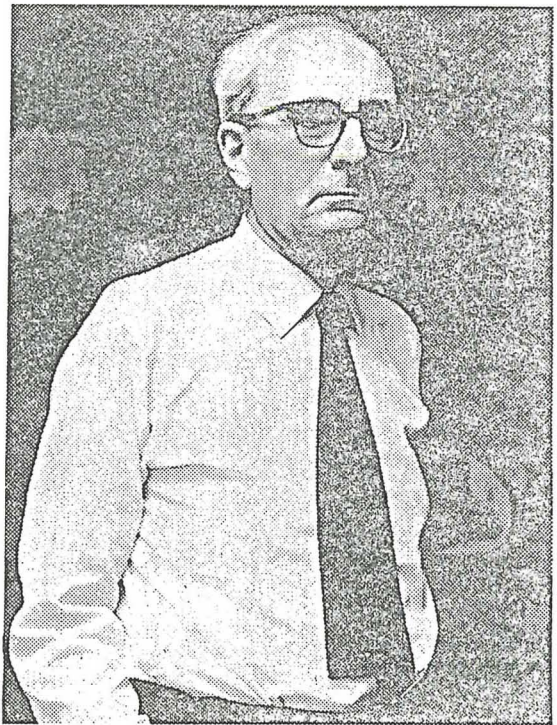
『性現象の歴史』は序章「知
 の意識」が出っかかり、なかなか後
 が続かなかった。構想が二巻三巻
 したためだが、その間の経緯が詳
 しく紹介しつづけるのも興味深い。
 そのあと死の直前に「まじまじ」快
 楽の活用』『目玉の配座』の二
 冊が出版された。続刊「肉体の告
 白」もほぼ完成に近い原稿が残さ
 れてあるのだという。一日も早く
 刊行が待たれる。

本書は専門の研究書でないが、
 フーコーという稀有な知性の躍動
 を伝えてくれることが、翻訳
 も方々である。原著に付されてい
 たフーコーの著作目録や、研究書
 ・論文のリストなどが採録されてい
 ることだけでも惜しまれる。田
 村敏郎(新潮社・三三〇〇E)
 東京工業大学助教授
 橋爪 大三郎



構造主義と神話学誕生の秘密を語る

レヴィ＝ストロースの『遠近の回想』を讀む



レヴィ＝ストロース

★クロード・レヴィ＝ストロース(一九〇八)はフランスの文化人類学者。パリ大学卒。五九年から八二年までコレージュ・ド・フランス正教授。著書に「親族の基本構造」「悲しき熱帯」「構造人類学」「野生の思考」「はるかなる視線」や「きもち焼きの土器づくり」など。

見過ごせない内容

「ポスト構造主義」がいちばん新しくあった一時期、「構造主義はもうため」なのが当たり前だと思われていた。だがそれは、何の根拠もなかった。なぜなら誰も、構造主義のロジックをきちんと理解してはいたわけではない。ポスト構造主義とは何かをきちんと主張したわけでもなかったからである。いまわれわれは、構造主義という思想の山脈の大きさを、改めて測り直すべき時であろう。

一九〇八年生まれ、今年八四歳になる構造人類学者クロード・レヴィ＝ストロースの自伝的対話『遠近の回想』(一九八八)の翻訳が、最近出版

世界的に著名なフランスの人類学者レヴィ＝ストロースが、ジャーナリストのエリボンに答えて八〇年に及ぶ自らの生涯と精神の軌跡を語った『遠近の回想』が刊行された。文化人類学者としてのレヴィ＝ストロースの学問的な足跡だけでなく、フランス思想界の知的交流の実際をも語った、たいへん興味深い内容の一冊である。橋爪大三郎氏に書評を寄せてもらった。

参照すべき第一級の資料

漠然と信じられてきたイメージに修正を迫る

対談の相手は『ミシェル・フーコー伝』(新潮社)で一躍注目のジャーナリスト、デュー・エリボン。対話の形式をとっているが、エリボンはあくまでも聞き役に徹し、読者がいちばん知りたいと思っているレヴィ＝ストロースの、構造主義と神話学誕生の秘密をうまく引き出している。

この書物の成功は、『フーコー伝』でもみせたエリボンの周到綿密な調査の力量と、冷静な観察眼に負うところが大きい。おかげで、『悲しき熱帯』(一九五五)以降まとまったかたちで知られることになったレヴィ＝ストロースの伝記的な事実が、われわれの前に明らかになった。サルトルやフーコーとは違って、レヴィ＝ストロースの場合、その個人生活についてあれこれ知ったとしても、彼の仕事を理解するうえであまり足しにならない、という見方もある。しかし、青年時

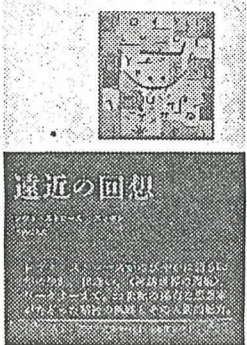
☆はしづめ・だいさぶろう氏は東京工業大学助教授・社会学専攻。東大大学院博士課程修了。著書に「言語ゲームと社会理論」「仏教の言説戦略」「はじめの構造主義」「冒険としての社会科学」「現代思想はいま何を考えればよいか」など。一九四八(昭和23)年生。



橋爪大三郎

「構造」と「変換」
レヴィ＝ストロース、ラカール、フーコー、アルチュセール、バルト、……。彼らはかつて、ひとまとめに「構造主義の伝記的な事実が、われわれの前に明らかになった。サルトルやフーコーとは違って、レヴィ＝ストロースの場合、その個人生活についてあれこれ知ったとしても、彼の仕事を理解するうえであまり足しにならない、という見方もある。しかし、青年時

は漠然と、構造を「いくつかの要素の固定した関係」のよきなものとイメージし、それを静態的とか形式的とか批判した。しかしそれは本当は数々の概念とセットでないと理解できないものだ。▲構造の概念に関するあらゆる誤解、概念に因するあらゆる誤解、構造概念のあらゆる濫用は、その人が構造概念は変換概念を離れては考えられないという事実を求めたこと、意外なのは、神話学を手がけるようになったという言い方を、彼ら自身も言っている部分である。▲出からフーコーが、自分を構造主義者と呼ぶのはいいと、研究第五部門の教授に選任されたのも▲ままた、当然のこととして置かなくてはならない。この第五部門は宗教学、S/Zをはじめとするバルトの仕事にも冷淡である。主として婚姻規則とか親族体系という問題に関心を集中し、「学批評」に至っては、▲構造主義の目的を達成しなければならぬ



竹内 信夫訳
46判・350頁・2884円
みすず書房

全国古本屋地図
'91改訂新版 定価1800円 日8判 352頁
(税込・送料260円)
全国の古本屋2300軒を詳しく紹介。一覧、主要都市の案内図93、分野別古書店一覧、全国古書即売会一覧、文学記念館一覧付。
〒101 千代田区神田小川町 3-22 TEL.03(3292)0508 日本古書通信社

羽目に立ち至ったのです。(一三五頁)この証言はもろくも嘘でなからう。だがそれは、ひとつのきっかけにすぎなかったと考えるべきだ。別な箇所、彼はこうのべている。▲フランス滞在中に直接知ることもできた部族に、次で、私はずっと以前から、次のような点に気がついていた。つまり、ポロロ族と、シエ族のメンバーであるのもっとも近縁の部族において、その社会組織が似ているということ、その相互の差異はある一つの交換プロセスの異なる段階として解釈でき

書評

1992-4-④

『社会認識と想像力』 厚東 洋輔著、ハーベスト社、1991、334頁、3399円。

橋爪 大三郎（東京工業大学）

《本書のテーマは「社会学的想像力」である。》（あとがき）《私が本書を通して主張したいのは、想像力なしには「社会」を認識することはできないということである。……「社会」がほかの事物と同じ様に、一つの実在として存在しているのは、実は、私達の想像力のなかにおいてなのである。「社会」を明晰にとらえるために発動されるこうした想像力を sociological imagination と呼ぶならば、＜社会学的想像力＞の構造と機能を立ち入って明らかにすること—これが私の論ずべき課題となる。》（第一章、2頁）

こう宣言する本書は、四部十二章からなる。第Ⅰ部「社会認識と想像力」。第Ⅱ部「世界製作としての想像力」。第Ⅲ部「社会学的想像力の諸類型」。第Ⅳ部「物語と社会学的想像力」。各部三章ずつの整然とした構成だ。これまで論じられることの稀だった想像力というテーマを、正面きって本格的に取り上げた書物の登場を歓迎したい。

*

本書のなかで、（私個人の好みかもしれないが）いちばん筆が踊っていて楽しく読めたのは、近代的な社会認識がどのように芽生えてきたのかを追った第Ⅲ部である。古代ギリシャの都市国家のイメージが、ホップズの社会契約説のアイデアのなかに時を隔てて反響していく事情。フィールドワークの創始者マリノフスキーの民族誌が読者を魅了するのは、旅の物語としての構成を備えているゆえだという分析。柳田国男の郷土研究が、都市の対極にある郷土を《「日本国」を認識するための模型＝モデル》（234頁）と位置づけていたというあたりの指摘。著者厚東氏は、社会学の学説史のみならず、西欧文明史にわたる豊富な知識を縦横に引証して、社会学が主として＜都市＞のイメージから、社会認識のための最大のヒントをひきだしてきた事情を、説得的に論証していく。

さて、以上のように社会学的想像力の諸類型として、市民社会的想像力（第7章）・人類学的想像力（第8章）・民俗学的想像力（第9章）の三つを掲げたあと、著者は続く第Ⅳ部で、それが「物語的構成」をとることの必然を論じる。たとえば西欧近代は、社会を鳥瞰する構成をそなえた小説を生み出した。ところが、日本の私小説はそれを欠いている。社会認識に必要な想像力のあり方に問題があるのかもしれない（第10章）。小説にかぎらず、社会契約説のような学説も、起源を物語るという形式をもっている点が注目される（第11章）。小説／社会認

識(社会学)／歴史学は、西欧の物語的構成の三つの可能性である。ウェーバーの仕事は「＜起源の再構成＞のディスクール」、マルクスの仕事は「＜概念の弁証法＞的語り」とみなすことができ、どちらも、社会学的想像力がすぐれた物語に結実した成果なのである（第12章）。このように展開する本書の後半部は、社会認識に画期をもたらした重要な仕事がどれも、社会学的想像力を自在に駆使した業績であることを照らし出していて、印象的だ。

*

このように内容の豊かな本書であるが、全体の構成や執筆の意図がどの辺にあるのかと考えると、わかりにくくなっていることに気付く。特にはっきりしないのが、著者の問題にしている社会学的想像力とはいったい、社会を認識する社会学者にとって必要と考えられているものなのか、それとも、社会を生きる一般の人びとにとって必要と考えられているものなのか、どちらなのかということだ。

もちろん前者であろうことは、とりあえず間違いない。本書のあちこちに、社会学的想像力を、社会認識の方法論として問題にしたいという趣旨のことが書いてあるからだ。本書後半の行論の進み具合も、それを裏書きしている。

しかし、話はそれほど簡単でない。社会学的想像力を、社会を生きる人びと自身の能力として問題にするというモチーフも、一貫して見え隠れしているのだ。社会がとて一望しきれないほどの範囲に拡大したため、社会の実体はもはや人びとの想像力のなかにしか結ばれなくなった。それゆえ、メタレヴェル（社会学者）でなく、オブジェクトレヴェル（社会を生きる人びと）でこそ、まず想像力は根を下ろしている。さらに言えば、社会の拡大（近代化）にともなって発展した人びとの想像力が、社会認識を結実したひとつのかたちが社会学であると、著者は位置づけているのだ。これによれば、想像力が社会学を育んだのであって、その逆ではない。

読者である私とまどうのは、ここである。「社会学的想像力」というコンセプトを理解しようとする場合、社会学→想像力と解すればいいのか、それとも、想像力→社会学と解すればいいのか？ 前者なら、学問・研究をするのに、よいアイデアを欠くことはできず、それには想像力を養っておくにこしたことはないという、よくある親切な指摘と変わらない。先輩社会学者から学生諸君への、例示に富んだ研究の手引きということになる。しかし後者なら、想像力は社会学の存立に欠かせない条件になる。もっと言えば、社会学の機能は、いわゆる自然科学と区別され、ある社会を生きる人びとに、その世界についての想像力を喚起させ、ありありとした社会の像を提供することである、ということになる。著者が第12章でウェーバーやマルクスの仕事を「物語り」行為に還元してみせているのは、そのことを主張したいためとも考えられる。とすれば、社会学は「真実」を語るかに見えながら、実は人びとを「納得」させているだけ（社会学≠科学）、ということになる。

本書は、以上二つの可能性を秘めているが、著者の考えているのがいったいどちらであるのか、よくわからない。もしかしたら、著者自身もそこをわかり切らないままに、筆を進めているのかも知れない。そう曖昧に読まれてしまう余地を残しているところが、本書の弱点（あえ

て言えば詰め甘さ)であると私は思う。

*

読者として“想像力”をたくましくするならば、本書が本来あるべき姿とは、「想像力こそ社会学の母体であり、想像力なしでは一切の社会認識は不可能である」という強力な主張を展開することなのではないか。

では、本書の前半部分で、想像力はどのようなものと定義され、どんな理由で社会認識に必要なだとのべられていたろうか？

著者の整理によれば、《想像力は、1.全体化(思い浮かべる) 2.造形(描き出す) 3.現前化(想像する)という三つの局面をもつ……。全体を表象し・造形し・現前化する、という三つの作用が、一点に向かって集約され総合されるとき、そこに生み出される能力が想像力である。》(19頁)言いかえるなら、《全体化された対象に<形>をあたえ、それを介して<不在の対象>を具体的なものとして現前化する能力》(21頁)ということになる。

さて、このような想像力を介さないと社会が認識できないのは、社会が<形>あるものとしては現前しないからである。社会はひとりひとりの経験を越えて広がっている。人びとは、社会を個々に生きてはいても、社会そのものを認識しているわけではない。

そこで、社会認識を課題とする社会学の困難を、著者はつぎのようにのべる。《社会認識の対象は、まず第一に、全体としての「社会」である。……しかし、社会認識には、実は今一つ隠された対象がある。それは一つの全体としての「個人」である。……社会と個人を同時に認識するには、科学の尋常な方法だけでは駄目である。そこで呼び起こされたのが「想像力」である。……「社会」を一言で規定すれば<抽象的な全体>と言えるだろう。「個人」は普通の意味での「全体」であるが、「社会」は、社会=Σ全体 であるので、いわば二階次の全体である……。》(56～59頁)

科学は、部分が全体を構成するという「原子論」でできている。この通常の科学の方法(論理的推論)の範囲内に、社会認識の議論が収まらないと言える根拠は、《社会認識の「原子論の体系」は二つの全体をもつ。「個人」も全体なら「社会」も全体》(56頁)だからだ。社会も個人も全体だと言うが、社会が全体なのは明らかなので、この主張は、個人も全体であるという著者の見解の上に組み立てられている、と言えよう。ここがおそらくポイントだ。

議論はこのあと、この二つの全体(ミクロ・コスモス/マクロ・コスモス)をアナロジーの関係で結ぶことが、モデルによる認識の本質だ、という具合に進んでいく。地図を例にとって、著者は、世界視線でも虫瞰図でもない鳥瞰図を、想像力がもっとも有効に働く場合だと位置づける。社会を認識しようとする場合、ひとが鳥瞰するモデル(小社会)こそが、都市であり、フィールドであり、郷土である — こうして、本書の前半部は、冒頭に紹介した第Ⅲ部の議論へと続いていく。

。先ほどのポイントに戻ろう。著者は個人を、どのような権利で「全体」と呼ぶのか？それは社会が「全体」であると言う場合と、意味がずれているのではないか？

全体のなかに全体があるというのは背理だから、単純な形式論理(尋常の科学)で解けない。そこで、想像力の出番になるという順序だ。しかしこの背理は、とりえず著者が持ち込んだもので、すべての社会学者が共有しているものではない。

私が思うに、個人を「全体」と呼ぶことは、可能だろうが条件付きである。つまり、その場合、個人は外側から見られてはならず、内側から見られたものである必要がある。「全体」である個人とは、「世界-内-存在」などという場合の「世界」にも当たるもの、経験の生じる地平のことだ。その内部に、経験的な対象が現前してくる。個人そのものは経験的な対象でない。このような現象学的な視点を前提にした場合、個人は全体であると言える。これに対して、社会が「全体」であるのは、論理的可能性としてだ。それを与えるのは、すべてを寄せ集める操作(著者の言う「Σ」)だ。この全体は、経験できたり現前したりするものである必要はなく、ただ「考えることができる」だけで構わない。ふつうの「原子論の体系」にいう「全体」と同じものだ。

そこで、著者の結論的主張 — 《想像力なしには「社会」を認識することはできない》(2頁) — に読者が同意できるためには、つぎの二つの前提を、著者と共有している必要があることになる。

(1)社会を「全体」と考え、かつ、個人を(現象学的な意味での)「全体」とみなす。

(2)この二つの「全体」を説明することを、どちらも社会認識の課題とする。

逆に言えば、(1)に同意しない(個人を「全体」とはみなさない)か、あるいは、(2)に同意しない(「全体」社会を説明することだけを課題にする)という選択をするならば、著者の主張には同意できなくなる。

では著者は、(1)、(2)に対する反論の可能性をどのように封じているであろうか？ 私のみどころ、その点がじつくりのべられていない。そのため、著者とは別の行き方をする社会学者たち(たとえば、個人についてのいくつかの仮定から、社会について成立する命題を導こうとする、数理社会的な研究や実証的な研究)を説得して「想像力は社会認識に欠かせない」と信じさせるに足るだけのパワーが感じられないのだと思う。

そういう微妙な読後感を残しはするものの、本書はやはり労作である。本書の指摘するとおり、たしかに《近代の社会認識は、全体社会の把握と人間の理解という二つのテーマ》(57頁)のあいだを揺れ動いてきた。本書は、この二つのテーマを、どのような統一的な展望のもとに、社会学という体系的な知識にまとめあげることができるかについての、意欲的かつ果敢な提案なのだ。この提案が刺戟となって、多くの逆提案を呼び起こし、議論がいつそう進展することを期待したい。

BOOKS '92

『共同研究 冷戦以後』

中曽根康弘／佐藤誠二郎
村上泰亮／西部邁

「保守派」論客4人が論ず「冷戦以後」の世界の行方

《評者》橋爪大三郎 社会学

湾岸戦争、ソ連邦崩壊という歴史の大きな節目に当たって編まれるべくして編まれた、日本を代表する「保守派」の論客四人の大部な論考である。左翼・革新勢力に精彩なく、ポスト・モダン派が「反戦声明」で腰こけたあと、めぼしい議論は見当たらない。そんななか、まとまった著書を世に問うた著者たちの積極的な姿勢に共感する。適当なレッテルを貼って本書を読まず嫌にする向きは、必ずしうべ返しを食らうだろう。

共同研究 冷戦以後

中曽根康弘 佐藤誠二郎
村上泰亮 西部邁

の多様性がある程度許容する国際新秩序の実現をめざすべきだというのが、本書の指し示す方向だ。

少し作り急ぎの感も……

こう聞くと、すわ「日本再軍備」と身構える読者もいるだろう。そういふきわどい政治的選択に通じる議論とも言える。しかし本書の価値は、「保守主義」の立場を日本の選択に即して明らかにした、原則的な姿勢こそある。

そもそも《保守主義》とは何か？名前がよくないが、自由主義と違ってほしいと同じ。戦前・戦後を通じて、リベリズムの伝統がないに等しいわが国で、もっと評価されてよと思いたい。理性（人間の作為の能力）に信を置

毎月最低一回、二年間にわたって続けられた研究会が、本書の土台であるという。《本書はわれわれ四人がかりうじて互いに同意できる部分をまとめ上げたものである（あとがき）》。序

中曽根、第一章と第七章、西部、残る各章のうち、政治の部分、佐藤、経済の部分、村上、という分担で原案を執筆したあと、互いに再三の加筆をへて成ったという。おのずから著者たちの議論が収束していく緊密感が行間から伝わってくるが、話の筋がやや強引に思える部分もないではない。私人は、本書の主張のほほ七割がたに、賛成しながら読み進んだ。

さて、「冷戦以後」がどのような世界になるかを考えるには、冷戦そのものを冷静に分析し直すところから出発すべきだろう。著者たちもその手順を

むらかみ・やすすけ 一九三一年生まれ。国際大学教授。理論経済学専攻。



きすぎる民主主義・社会主義とも、虚無主義に転落するほかない価値相対主義とも一線を画し、社会の伝統やルールのもつ合理性に根拠を置こうとする立場が《保守主義》である。五〇〇八〇年代の左翼的熱狂から、七〇〇八〇年代のシラケた内面へ。そういう精神の振幅しか経験していない世代の、エア・ポケットでもある。ルール自由の観念によるなら、吉本隆明氏の言う

踏んで、戦後の日本をかくあらしめた世界について、オーストリアな考察をめぐらしている。

重要と思われる論点をいくつか確認しておこう。

まず、冷戦が終結した結果、今回の湾岸戦争を機に、《侵略戦争は違法であるという限りにおいて、世界的な合意ができてきた。その結果、否認さるべき戦争と認めるべき戦争が国際ル



なかそね・やすひろ 一九一八年生まれ。元首相。自民党最高顧問。

にしべ・やすむ 一九三九年生まれ。評論家、社会経済学専攻。



「共同幻想の逆立」のような屈折を経ないで、個々人の人生の場所から大状況へ、思考の道筋を歩めるのかもしれない。著者たちの言う「開かれたナシヨナリズム」と、ルールを重視する私の立場は近いのかもしれないと思つた。湾岸戦争にあわて「反戦声明」を出した「若手文学者たち」のどうしようもなきに比べれば（比べること自体、失礼なのだ）、著者たちはすつ

ールに基づいて定まるといふことになつた（二六六）。このことを理解しない日本人の《金んだナシヨナリズム》が「二国平和主義」のような反米的《対外強硬路線》をうんでいる。《開かれたナシヨナリズム》を確立していくためには、まず、現憲法をいかに改正するかという論議に着手しなければならぬ（二六九）。

また著者たちは、《冷戦を支えた二極構造が崩壊したあとに訪れるのは一極構造でも多極構造でもない……各国民国家が……さまざまなレベルで……国際ルールに基づく国際秩序を漸次的に形づくっていく……のが国際社会の実相》（二二六―二七六）だとする。ここで、中国など《東アジアの発展モデルが欧米の市場モデルと抵触》（二二〇―二二一）する可能性があるが、日本はアメリカと責任をわかち合つて、ルール



さとう・せいざぶろう 一九三二年生まれ。東大教養学部教授。政治学専攻。

とまともである。それは当然として、最後に本書の悪口を言っておこう。

第一に、分厚いわりに繰り返しが多く、読後感がすっきりしない。『マニフェスト』の要素と『国際関係研究書』の要素とが、どっちつかずにまざってしまったためだろう。

第二に、それと関係するが、日本人が「冷戦以後」どういう選択をすればよいか、十分具体的な提言を期待して読むと、ややがっかりする。また思想書として読むには、提言に至る思考の運びが人びとを導くだけの高雅な弾力（規範力）に欠けるうらみがある。要するに、少し作り急いだ感があるが、本書は後世、九〇年代の思想の転換点として振り返られる書物となる。

（文藝春秋／一八〇〇円）

地球の発見 ブックス 全7冊

ナショナル・ジオグラフィック協会編
いまだ知られざる美しい地球、汚染され危機にひんした地球……その実像に（地球人）の視点から豊富な写真と鋭角な解説が迫る。全頁フルカラーで超一流カメラマンの写真を満載、執筆陣は選りすぐりのライターが結集。



エメラルドの王国 海と陸が出会うところ

熱帯雨林の危機 大出 健訳
世界の海岸線と自然 海保真夫訳
大地の贈りもの 松本剛三訳
B5判変型・平均二〇〇頁 定価各一九〇〇円

地球を救え

ジヨナサン・ポリット編 岸沢高志監訳
森林消滅、酸性雨……いま地球が危ない！ 世界32ヵ国から137人が熱いメッセージ。
A4判変型・上製・206頁・定価2500円

岩波書店
東京都千代田区一ツ橋(定価は別紙)

平成4年(1992年) 4月7日 火曜日

読書—ビジネス—トレン

美人コンテスト百年史 若妓の時代から美少女まで

井上章一著



井上章一氏

ミス・コンテストをめぐる論争が世上にきやかな折から、タイムリーな好著。著者は「あとがき」で今ミスコンの成立背景を、歴史社会的に説明するが、風俗史めいた読みものになっているが、議論の相立てがしっかりしていて、実に面白く読ませる。

ミスコンの通史は海外にもなく、本書が世界初という。欧米文化の影響や女性の社会進出につれて、写真による「美人共進会」や応募者の「水着審査」が日本に受容され

ていく過程は、事実として面白いし、当時の一般人の日常感性を知る史料としても一級である。

それを踏まえた著者井上氏の結論は明快だ。百年前「美人へんげい」は、くつろぎの女性(芸妓や女優)の間でしか可能でなかった。以後は、しろうこがそれにとって代わる歴史。つまり、ミスコンテストは、性を商品化し、ており売春(つうじう)という明治の通念が解体しつつある過程である。この観念を思い出させようとするミスコン反対運動は、アナクロ的な啓蒙(一八四)にしかなら

女性の社会進出にもなう現象

ミス・コンテストをめないと著者はいう。美人コンテストが近代化、女性の社会進出にもなう現象だということ。著者の発掘した史料からだけでも明らかだ。それは当時から、そういう文脈で受け取られていた。高群逸枝が「世の醜男醜女に与ふ」という論文で「女に経済的な実力がつけば、ますます美人の価値が高くなる(八〇)と予言したそつだが、この先駆的フェミニストの洞察はさすがに鋭い。著者は、この予言の延長上で「女の能力や才能……ルックス……にたいして代償がはらわれる」という近代社会、市場経済の必然で「フェミニズムの立場から、積極的に肯定されるべき」と(一八八)だとする。評者も異論はない。

著者の本領はしかし、こいつした結論よりも、個々の歴史的な事実をいねいに掘り起す手際の優しさにある。反ミスコンの方々にもぜひ一読をお勧めしたい。

(新潮社・二二〇〇円)
東京工大助教授
橋爪大三郎

1992年(平成4年)8月23日(日曜日)

Book Review

形骸と反逆

丸山 眞男著

明治維新にみる日本の精神

市民的と著名な政治学者、丸山眞男氏の待望久しい論集が刊行された。

丸山氏は、その業績と影響力が巨大であつたために、公刊された著作は数々に少ない。今回の『形骸と反逆』は、明治維新前後の激動の時代を論じる。江戸儒学を致す『日本政治思想史研究』と、戦前の植民地主義を致す『現代政治の思想と行動』の二つの主要な著書に、近代日本の政治思想史

を一望できる構図になっている。取り上げられているのは佐久間象山、中江良良、櫻痴論言、岡倉天心、内田魯三……といった多彩な顔ぶれ。いずれも傑出した人物ではあるが、時代の用意する種なかに収まらぬ、各人なりの軌跡を生きた思想家たちである。丸山氏は彼らの個人資料を、その時代背景と細密に照合し、そこに日本人の精神の思想的な真実を浮かびあがらせていく。

丸山氏が本書に集めた論文を貫くキーワードは、形骸の「形骸と反逆」に替わつた。『形骸と反逆』…自我を超えた客観的原理、または自我の辱めを辱者・集團・制度など、にたいする自我のぶるまにかたむかる。尊皇攘夷をかかげて尊皇に反旗をひるがえした志士たち。明治政府の行き方命令がけつした平士族や民権運動の人々。彼らの抱いていた正統性の観念とその限界が、その後の

日本の政治的進路を決定づけた。そして現在の我々を苦しめている。

本書で精読したのは、丸山氏の孤獨だ。氏は才氣豊かな真面目な学者である。しかし時代が、氏を戦後知識人のスタートに押しおけた。氏も戦後民主主義を能くこなすたが、次第に形骸と反逆のめがたれていく。

形骸と反逆の二つの方面にこし、氏は驚くほど謙遜である。自我は理解されず、後継者も書いていない。人々の政治意識を未熟なままである。丸山氏の不幸。それは、氏が全力で研究しつづけた政治思想史が、日本に育たなかつたことではないだろうか。(丸山眞男著・三一〇〇円)
東京工業大学助教授
橋爪大三郎



●この本を推す●

レコードの美学——細川周平

橋爪大三郎

W・ベンヤミンが先駆的な論文「複製技術時代の芸術」を発表したのは一九三六年のこと。当時はまだ、LPレコードもなければカセットテープもなく、ステレオもビデオもウォークマンもCDももちろんなかった。20世紀後半に登場したこれら複製技術の氾濫は、われわれの音楽世界や美的感性をどう変化したのだろうか？

著者細川周平氏は、こうしたまっとうな疑問に取り組み、『ウォークマンの修辞学』の著者でもあり、音楽のあらゆるジャンルに貪欲な関心をもつ彼は、この変化の本質を「ほとんど全ての音楽が「ポピュラー化」しつつあること」(iv頁)ととらえる。本書が「レコード」とよぶのは、そうした動きを支えるあらゆる複製技術、すなわち《音楽的時間を書き込む機械》のことだ。

本書は三部からなる。第一部は、レコードの考古学。エジソンによるフォノグラムの発明からCDに至る録音技術の歴史がスケッチさ

れる。重要なのは、複製技術が音を「再現」するのでなく、まったく新しい美的体験を創造する点。ビング・クロスビー以降のポピュラー・シンガーたちは、ハイデガー風に言えば「マイクロフォン・内存在」(85頁)であり、『サージエント・ペパー』以降のビートルズやグレイト・フルードは、スタジオ録音でしかありえない音作りを始めて、オリジナル/コピーの神話を打ち破ったのだ。

第二部は、聴取と複製技術。自律音楽(いわゆるクラシック)は、聴取の特別なあり方(自発的な受動性)に支えられていた。複製技術は、音源を複製することを通じて、この聴取のあり方を変化させる。レコードの普及は、コンサート自身を一種の「模倣」に変質させてしまった。

第三部は、美的経験としてのレコード聴取。ここで細川氏は、複製技術とともに隆盛をとげたポピュラー音楽の本質を、「サウンド志向」と規定すべきだと提案する。「ポピュラー」かど

うかは、音源の美的な性質によるのではなく、そこからどういう「効果」を受け取るかという聴衆の問題なのである。

本論以外に、テクノロジーや聴取をめぐる付論三篇を収めた本書は、20世紀消費文化の動向を音楽を軸に説明する、もつとも正統的な書物である。

不幸なことに、日本の音楽アカデミズムは「ポピュラーなもの」に対する感受性を欠いてきた。ポピュラー音楽がこれまできちんと考察されなかったのは、それが論じるだけの準備が既存の音楽学になかったからである。著者は、批判的マルクス主義、現象学、社会学、記号論など、およそ役に立ちそうな議論を総動員して、複製技術が音楽の第一線にまさるにひき起こしつつある変化に肉薄している。その力量に驚くと同時に、「ポピュラーなもの」が美的である」という当たり前の事実が、これほど厳密に立論されたことを喜びたい。(勁草書房刊)

CULTURE CARAYAN

はしづめ・だいさぶろう ポピュラー音楽学会会員としても活躍中。近著は「民主主義は最高の政治制度である」(現代書館)。



JR四谷駅から新宿方向へ歩いて数分。右手のビル地階にあるのが、ジャズ・ファンにはお馴染みの喫茶「イーぐる」だ。

そのマスターの後藤雅洋さんが、毎土曜日の午後3〜5時、ジャズの名盤をかけながらDJ風に解説してくれる連続講座を始めたという。さっそく出向いてみた。毎回2人のジャズメン、各々3枚計6枚のアルバム片断を紹介し……1年50週で「ジャズ・オブ・パラダイス」に掲載したすべてのアルバムをひととおり紹介する予定」という、人柄そのままに大河のようにゆったりとした計画である。私が顔を出したのは第6回目、ABC順でマイケル・ブレッカーとクリフォード・ブラウンの組み合わせだ。

「イーぐる」は、二十数年前に開店した当初から、店内の造作もほとんど変わっていない。当時は雨後のタケノコのように乱立したジャズ喫茶もいっしょに淘汰され、いま都内に十数軒を残すばかりという。そんな時流にとわれないで、こよなくジャズを愛する後藤さんがカウンターでじっくり聴きこんできた想いが、簡潔に刈り込まれた言葉で伝えられるのが快い。

マイケル・ブレッカー(ES)は、初めて聴く。80年代のアーティストで、フュージョン・アルバムに多く登場するスタジオ・ミュージシャンという。困塊の世代的私はフュージョンと聞くだけで敬遠しがちだが、そこを見透かして、それなりに骨のあるところをちゃんと聴かないとダメだと後藤さんが釘をさす。87年の初リーダー作は、たしかにコレトリオンそっくりの指づかいだが、全体の印象はカラリとして別物だ。コピーで配られた「ジャズ・オブ・パラダイス」の後藤さんの解説を目で追いながら音聴くと、的確にポイント



後藤雅洋著「ジャズ・オブ・パラダイス」(左)「ジャイアンツ・オブ・ジャズ」(中)「ジャズ解体新書」(右)(すべてJICC出版局刊/1200円、1000円、1600円税込)連続講座「ジャズ・オブ・パラダイス」を聴くは、今年4月にスタート。1年位かけて全302枚を聴き通す予定。「イーぐる」=東京都新宿区四谷1-8ホリナカビルB1 ☎03(3357)5957

押さえた文章であることに舌を巻く。3枚目の「シテイスケープ」はもの憂い都会の心象風景をメロディ・アスな旋律にのせて、いまでも耳に残る一曲だ。



クリフォード・ブラウン(ED)は言うまでもなく50年代、ハード・バップの天才的ドラムベーター。後藤さんはマイルス・デイビスより、彼の才能を高く評価すると言った。お世辞にも録音状態がよいと言えないLPだが、その溝の間からでも《炸裂する音色の輝かし

さ」は手にとるように伝わって来た。最後のLP「ザ・ビギニング・アンド・ジ・エンド」は、突然の事故死直前の録音。一瞬ごとの跳躍に賭ける二十代半ばの彼の(即興に臨む姿勢のいさぎよさ)を堪能した。

たつぷり2時間、いつものコーヒ一杯の値段でジャズの醍醐味を心いくまで満喫できるとあって、店内はほぼ満員の入り。私のように友人からの聞きかじりで、ジャズの全体像がまるでわかっていない不真面目なファンには、おあつらえ向きの企画である。若者や女性の姿も目立って、新しいファン層の拡がりが見られる。

音源がCDへと急速に切りかわりつつある今、スタンダードなジャズの名盤を自分の耳で聴くことが非常にむずかしくなっているのだという。音のアルヒーフ(資料館としてのジャズ喫茶の役割)に目を向けた、今回の企画に拍手を送ろう。

後藤雅洋さんには、今回の連続講座の種本「ジャズ・オブ・パラダイス」(JICC出版局)のほか、「ジャズの名盤・名盤」(講談社現代新書)、「ジャイアンツ・オブ・ジャズ」(JICC出版局)の著書がある。そしてつい最近、語り下ろしの対談集「ジャズ解体新書」(JICC出版局)が出た。さっそく頁を繰ってみると、これがまた対談という極めてスリリングな形式(即興の妙味)を活かしたジャズである。この不可思議な音のパラダイスに魅入られた人びとの語りや耳を澄ませると、ジャズの文脈史的な拡がりや奥行きがひしひしと感じられる。



本と連続講座で辿る ジャズは不可思議な天国

(東京工業大学助教授/社会学)

橋爪大三郎

文明の差異を解く鍵

—山本七平氏の聖書学



橋爪大三郎

『禁忌の聖書学』と聞くと、何のことかと戸惑うが、「禁忌」とはタブーの意味。聖書学が通常あまり触れられない角度から、聖書のテクストを読み直してみようという趣旨である。

聖書学は、キリスト教の聖典である旧・新約聖書を、その成り立ちや内部構造に立ち入って解明する学問である。わが国では想像しにくいのが、欧米社会でこの学問は、比類のない伝統と知識の蓄積と権威とを誇る。

ところで、聖書学はふつう、キリスト教の立場から研究されるものである。けれどもよく考えてみると、旧約聖書はもとユダヤ教の聖典でもある。そこでユダヤ教の伝統から聖書をみると、また違ったように読める。

さらに同じ旧約聖書と言っても、現在正典とされる聖書のほかにも、初期キリスト教の成立に大きな影響を与えながら、そのうち忘れられてしまった七十人訳の旧約聖書(ギリシャ語訳)もある。聖書ではないが、同様にキリスト教の形成にあずかって力があったヨセフスの著作や、新約聖書と同じ頃に成立した死海文書

のような資料もある。これらを縦横に参照しながら、山本七平氏一流の斬新な切り口でキリスト教信仰の本質に迫る——これが『禁忌の聖書学』(八月、新潮社刊)である。

著者の山本七平氏は、昨年十二月に亡くなった。本書は生前、氏が『新潮』に連載していた原稿をまとめたもの。今回頁を繰ってみて改めて、わが国知識界のもっとも苦手な部分で息の長い仕事をのこしてくれた氏の不在を、惜しんでも惜しみ切れない気持ちになった。

本書は六つの断章からなる。

最初の「裏切者ヨセフスの役割」は、『ユダヤ戦記』などヨセフスの著書を通じて、西欧世界がキリスト教を受容していった事情を丹念に追う。ルター以降の聖書中心主義に、知らず知らず影響されてしまっているわれわれには、初期のキリスト教がむしろヨセフスの書を通じて広まって行ったという事実は意外である。たとえばセシル・B・デミル監督のハリウッド映画『十戒』で

は、ファラオの王子だったモーゼがエチオピアに遠征したことになるが、それなどはヨセフスの書を通じて信じられていることなのである。

第二の断章「マリアは「処女」で「聖母」か」は、パウロがマリアを聖母と考えていなかった事実注意到注意をうながすことから話が始まる。ではなぜ、マリアは処女とされたか。処女懐胎信仰の起源が、実は『七十人訳』の誤訳(ヘブライ語の「おとめ」↓ギリシャ語の「処女」)にもとづくマタイの引用にあることを、キリスト教学者のハルナックが明らかにした。ここからニケーア信条(聖霊によって処女マリアから受肉し、人となった)に至るキリスト教の発展プロセスを、山本氏はヘレニズムの濃厚な時代思潮と絡めて描きだす。

——という具合に、本書の六つの断章は、ただひと塊りのテクストとみえる聖書を、その立体構造において照らし出していく。

私はこのように、山本七平氏の仕事を高く評価しているわけだが、氏の仕事の本質はどこにあるのか。それは、日本人の行動様式と西欧文明の行動様式とを構造的に对照させ、その差異を鋭く

えぐり出す独特の方法論にあると言えよう。

氏は、フィリピン戦線従軍の経験から、日本軍の行動様式について深い洞察をえた。そしてそれを、聖書を通じて解明できる、キリスト教(あるいはもっと広く、一神教)文明圏の人びとの行動様式と、比較することを試みた。そうした仕事の精華が、山崎闇齋学派と天皇制との関係を論じた『現人神の創作者たち』である。これは、日本人の思考・行動様式(氏の言い方を借りれば「日本教」)の「組織神学」である。それは、西欧世界の人びとが日本を深く理解しようとするれば、こう考えるに違いないという意味での「規範性」をそなえた、マックス・ウェーバーや丸山眞男に比肩する仕事であると思う。

国際化とは、異文化・異文明の緊密な接触を意味する。それは、西欧世界と日本社会とがどう共通の基盤を見つけられるかという課題を、われわれに突きつける。この課題を解く鍵は、双方の暗黙の前提——宗教にこそあると考えざるをえない。本書を読んで、その課題を終生追いつけてやまなかったのが山本氏であるとの思いを深くした。

(はしづめ・だいさぶろう 東京工業大学助教授・社会学)

文明の差異を解く鍵

築地書館

〒104 東京都中央区築地2-10-12
☎03-3542-3731・FAX03-3541-5799

一揆

青森の農民と「核燃」
明石昇二郎・高橋宏[著] ●新刊
保守王国・青森で「物言わぬ農民」が自民党政治に叛旗をひるがえした。彼らはなぜ立ちあがり、どのように闘ったのか。現代の農業者の闘いの記録を、壮大なドラマとして克明にたどる。¥1494(税込)

足・腰・肩の痛みを断つ 健骨法

西法正(国立立川病院院長)著
現代人の特徴となつてしまった腰痛や肩こりを治す方法はあるのか。整形外科の名医である著者が、老化を防ぎ、からだの痛みをとる方法を、イラストを使ってわかりやすく説明する。 ¥1494(税込)

鼻の相談室

なやむ患者となやまされる医師
高橋良[著] ●新刊 ¥1854(税込)
慈恵医大名誉教授・国際鼻科学会会長の著者が、「人間のための医療」という観点から、治療のあり方・考え方を具体的に解きあかす。

地獄蝶・極楽蝶

今井彰[著] ●新刊 ¥2060(税込)
「地獄蝶」「極楽蝶」と呼ばれる蝶とは、いったいどんな蝶なのか。どうしてそう呼ばれるようになったのか。民間伝承、文献をもとに、幻の蝶の正体をつきとめる。

平岩米吉の犬の本 重版出来

犬の生態 ●5刷出来
●マリ・クレール評—とびきりすぐれた犬の本。 ¥2000(税込)

犬の行動と心理

人間の友「犬」を理解する上で欠かせない本。 ●2刷 ¥2060(税込)

[1992年度版]総合図書目録進呈。
ご請求は上記宛先まで。

学芸文庫を読む

竹田青嗣 『現代思想の冒険』

橋爪大三郎

竹田青嗣さんの『現代思想の冒険』が、毎日新聞社「哲学の冒険シリーズ」から出版されたのは一九八七年春のこと。当時はまだ、ポスト・モダン思想の全盛期だった。そういう流れでこの本を手にした読者も多かったろうが、そういう時流とまったく別な狙いで竹田さんがこの本を書いていたことは、頁を繰ってみればすぐわかる。

『現代思想の冒険』は、この種の本としては驚くほどわかりやすい。初版を手にとって、そのことに私は感動した。最近ではわかりやすいこと自体、一種の流行りになっている。だが当時、それは画期的なことだったのだ。

竹田さんは、「文庫版あとがき」でこう書いている。《ポストモダンリズム……はその複雑さ、難解さで、奇妙な思想上の幻惑を人々に与えた。わたしがこの本を書いたのは、その考え方の基本形を取り出して、誰でもがこれに適切な判断を下せる場所にそれを置き直したかったからだ。このことは、思想が人間

の生活からかけ離れて……一種の権力性を帯びてしまうことに対抗する、ほとんど唯一の手段だからである。》(二四九〜二五〇頁) だから竹田さんのわかりやすさを、よくある啓蒙の文体とごっちゃにはしてはいけない。啓蒙の文体は、知識の格差を最初から前提にしたうえで、単なるテクニクとしてわかりやすさを装うものにはすぎない。それに対して竹田さんの場合、啓蒙の根拠になっている知識の格差そのものを解除することが、戦略の根本に据えられている。そこをどう読みとるか、読者にとって最大のポイントだろう。

さて、以上を頭に入れたうえで目次をみていくと、たった一冊の本なのに、デカルト、カントから始まる西欧思想の流れを概観できる壮大な構成になっていることがわかる。ポスト・モダンを早わかりしたくしょうがない人は、第2章「現代思想の冒険」に喰らいつけばいい。竹田さんが独自に読みこんでい

るニーチェやフッサールとじっくり付き合いたい人は、それぞれの章を読めば満足できるはずだ。終章の「エロスとしての『世界』」では、いまの世の中で最も見つけるのがむずかしい「生きる倫理」のヒントのようなものも見つけられるかもしれない。

私のように、思い出せば哲学の本をひっくり返してきた人間は、竹田さんのお馴染みのテクニクをすんなり、しかしびっしり押さえていく様子を見ると、その簡潔さに打たれてしまう。若い、哲学を学び始めたばかりの人びとは、竹田さんの本を教科書のように読むのかもしれない。それもよい。重要なのは彼という一人の人間のなかで、現代思想の多くの流路が確かに交叉している事実なのだ。

竹田さんが、専門でもないのに哲学の本を(もう一度)系統的に読み始め、このような哲学の全体を概観する本を書いたには理由がある。

竹田さんはたとえば、こうのべる。《人間は、生活のうちでの耐え難い苦しみ、日常を超えた大きな社会の枠組からもたらされていると感じるとき、この社会の枠組を改変してゆこうと努力する。そのとき社会の全体像を思い描き、その仕組をなんらかの形でとらえようとする。》(二六頁) 哲学は、そうし

て全体像をとらえようとした人びとの努力の産物であった。また、哲学や知識の全体が逆に、そうした社会の枠組をかたちづくってきた。この時代の「生き難さ」を抱えてしまつたら、過去の同様な人びとの思索と格闘して、そこにひと筋の活路を切り開く。いつの時代でもそれが、ほんとうに哲学をするということだったはずである。

だが、よくありがちなのは、哲学や知識の制度化と、それにもなう堕落だ。

哲学は無償の営みなので、それを保障するために大学などのポストを設け、哲学を制度化する。そこまではいい。けれどもそうすると、たちまち、哲学をする「ふり」をしてポストにありつく人びとが現れて、制度のなかに居すわる。そして、多数派になる。気がついたときには、哲学の制度があるおかげで、ほんとうに哲学をする人びとの思索がかえっ

て抑圧されてしまっていたりする。

自分の生き難さを課題として、自分の場所からこつこつ哲学を読んできた竹田さんは、こうした堕落に誰よりも敏感であらざるをえなかった。外国の事情によく通じていたり、学力が高かったりすることでさえ、哲学の堕落でありうるのだ。では哲学を、ふつうに哲学する人びとの手にとり戻すにはどうしたらいいか? それに対する竹田さんの回答が、この『現代思想の冒険』だ。

「冒険」——この言葉には、シリーズの編集者であった佐々木清昭氏の万感の思いがこもっている。それを受けて、『現代思想の冒険』は二重、三重の意味で冒険である。

まず哲学や現代思想そのものが、いつの時代でも、既存の発想や常識に戦いを挑む「冒険」としてしかありえない。第二に、それら

の哲学や思想とこれからがっぷり四つに組もうという若い読者にとって、読書は、自分の古い思考の殻や先入見と最後まで格闘しぬく「冒険」としてしか、可能でない。第三に、著者の竹田さんにとってもこの本は、知識の「権力性」に立ち向かうための有効な文体を生み出せるかどうかの、のるかそるかかの「冒険」にほかならない——こうした「冒険」が渾然一体になったスリリングな書物として、『現代思想の冒険』は哲学の冒険シリーズのなかで最も成功を収めた。それに刺戟され、私は『はじめての構造主義』や『冒険としての社会科学』を書くことにもなった。

九十年代に向かう知的潮流を切り開いたと言うにふさわしい本書が、ちくま学芸文庫に加わって、新たに多くの読者を「冒険」に誘っていくことを喜びたい。

(はしづめだいさぶろう 東京工業大学助教授・社会学)

日本エディターズ出版部

現代出版産業論

競争と協調の構造

小出鐸男著 高度成長以後の出版業の変貌を、豊富な資料と貴重な聞き書きによって、産業的・技術的視点からはじめて解明、出版の産業化の正と負の実態と問題点を実証的に浮き彫りにする。 四六判 2600円(税込)

回想の林達夫

久野収編 優れた思想家であるとともに他に類を見ない卓越した編集者でもあった林達夫の業績とその人柄を、久野収「林達夫さんとその仕事」ほか、氏ゆからの諸氏が回想する。 四六判 2400円(税込)

文章表現の研究

さまざまな生と死

井尻千男著 本書はいわゆる文章読本の一冊である。人に人相があるように文には文相がある。名コラムニストの著者が35人の存在感に満ちた文相とその真髄を探究する。 四六判 2060円(税込)

列島の文化史 ⑧

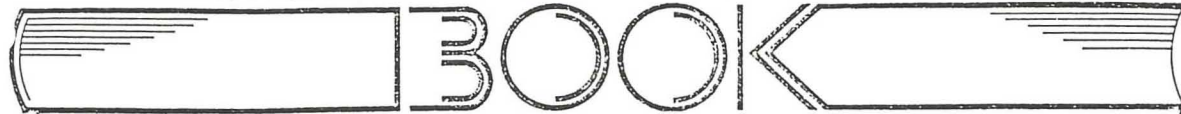
●特集・博物館再考「博物館と民俗学」牛島史彦・笹原亮二・大月隆寛ほか／●論文「木・山・海」大林大良、「八瀬童子の虚像と実像」山本英二、「中世の養生」盛本昌弘、「オオスズメバチハンティングとその食用慣行」野中健一ほか。 2400円(税込)

靈魂の民俗学

宮田登著 1800円(税込)

出版情報誌「クリッパー」見本呈
東京都千代田区三崎町2-4-6
TEL 3263-5892 FAX 3263-5893

1992年10月1日発行



本との出あい

『構造人類学』を読む

——橋爪大三郎

大学院を受験してすべってしまい、おまけのような一年を過ごすことになった。既存の社会学と折り合いの悪かった私は、何とか自分に納得の行く場所から、自分なりの社会学を始める筋道はないかと苛立っていた。

そんな暑い夏、私は、ペーパーバックで500頁はあろうかという分厚い英訳本に向きあっていた。著者はレヴィ=ストロース。構造主義の頭目として、名前だけは有名だった。その主著だという『構造人類学』を買求め、おそろおそろ頁をめくった。

見たことのない文体と、新鮮な思考のうねりだった。マルクス主義やドイツ観念論の作にこり固まっていた私は、久しぶりの解放感を味わった。気がつくと、大学闘争以来私を悩まし続けてきた多くの謎が、手の届く疑問のように思っていた。

この本を読んだきっかけはといえば、筑摩書房から当時出ていた『展望』に、吉本隆明さんが書いた「南島論」である。『共同幻想論』の続編とも言えるこの文章のなかで、吉本さんは、大林太良さんらの仕事がレヴィ=ストロースの構造人類学につながることを述べ、その主要業績の翻訳がまだないことに苦言を呈していた。それが印象に残って、『共同幻想論』に大きな刺激を受けていた私は、『構造人類学』をみつけて読むことにしたのだ。

翌年、なんとか社会学の大学院に入学した私は、レヴィ=ストロースの親族理論を研究テーマに選ぶ。そして、彼の『親族の基本構造』を読み、社会の根底に横わたる性現象～家族～親族の領域に、たしかな手応えを見つけた。「初期レヴィ=ストロース研究」という修士論文をまとめたのも、後年『はじめての構造主義』(講談社現代新書)を書くことになったのも、みなこの夏が始まりである。吉本さんには、『親族の基本構造』の粗訳をお送りしたところ、ご親切に翻訳を勧めてくださった。その話は結局実現しなかったが、その時に縁の出来た弓立社から、今年『小室直樹の学問と思想』という本を出すことができた。

二十歳を過ぎたばかりの素人として最初に読んだころの密度に、後年の私は届いていないような気がする。なにものにもかえがたい狂おしい必然が、若い頃の読書にはあった。その必然を大事にする以外に、自分の道をまっしぐらに進むすべはない——そう思うのは私だけであろうか。

(東京工業大学助教授・社会学)

産 経 新 聞

夕刊

平成4年(1992年) 11月5日 木曜日

◆ ◆ ◆ カ レ ン ト ◆ ◆ ◆

身体の比較社会学Ⅱ

熱心な多くの若い読者待望の、大澤氏の本格的な社会学理論書。全三巻の二冊目にあたる本書は、原始的な共同体や王権のあり方を考察する。

『身体の比較社会学』とは耳慣れない題名かもしれないが、決して奇をてらうものではない。身体とは我々が世界に内在する方法そのもの(こと)。そこから規範や制度などが生成するロジックを、多くの社会の比較を通じて解明するのが、この書物の目的だ。

著者は身体が、もっとも原初的なあり方から、過程身体↓抑

圧身体(ほぼ原始共同体に相当)↓集権身体(ほぼ王権に相当)↓へと展開していく必然を追う。アフリカのある部族の不妊治療(イソマ儀礼)や中国古代王権など、豊富な人類学、考古学のデータを存分に駆使して、原初から近代にいたる人類

史そのものを、集約的な身体組織のなすひと筋のドラマとして解き明かしていく様は圧巻である。



大澤真幸著

制度など生成する論理を解明

かった。大澤氏の仕事はその反対に、呪術治療の儀礼や近親姦の禁止、贈与から、未開の王権、文字、法、都市にいたるまで、一貫した図柄で議論を進めていく。こうした努力は、学界の動向からみて、貴重なものと言えよう。

最後のあとがきで、読者の批判に答えている部分も興味をそそいだ。私は著者に必ずしも同意しないが、本書が論争を提起したことは素晴らしいと思っ

(勁草書房・六一八〇円)
東工大助教授 橋爪大三郎

注目の構造主義生物学者・池田清彦氏の最新著である。現在、生物分類学の分野では分岐分類学と呼ばれる学派が世界的に流行している。しかし私は、この学派の方法論が合理的であるとも科学的であるとも思われない。本書は現代生物分類学批判の書(「はじめに」)である。生物学にまどろいとい私だが、引き込まれるように読みおぼした。本書は、分類とは何かを考へるところから始まる。素朴に考へればそれは、種々のものに名前をつけて整理(分類)

橋爪大三郎が読む

「分類という思想」池田清彦著 (新潮社・980円)



する。だが、よく考へればそう単純でない。名前のつけ方も分類も、人間の恣意的営みにすぎない。人間が勝手に名前をつけるから、動物や植物といった実体があるように思えるだけである。つぎに池田氏は、アリ、ストテレス、リンネ、キウヰエらの古典的な生物分類法を検討する。また進化論以後の分類学、とくに分岐分類学の考へ方を吟味する。分岐分類学は、もともと進化論と関係なかったリンネの階層分類と、進化の系統にもとづく分類とを折衷したもので、矛盾だらけと

いうのが著者の見解だ。もっと詳しくみよう。生物を、進化の道筋を規準に分類しようとするのはいい。しかし、進化の道筋を見た者がいない。推定は推定でいい。形骸を手がかりにする。要するに、生物の形骸を手がかりに生物を分類しているだけなのだ。しかも、分岐分類学は「最節約原理」という方法を用いるが、そこからえられる結論が、実際の進化と一致する保証はない。著者の批判は論旨が明快で、説得力がある。本書から私が強く感じるのは、健康な知のラディカリズムの躍動だ。

①自然分類群は、それを認識したり命名したりする人間(別に分類学者でなくともよい)がいて、はじめて存在する。②自然分類群は自然界に自存するものではないから、我々が創造すべきものである(二七頁)。言われればその通りであるが、われわれは、い、学校で習った通りに、哺乳類や軟体動物といった実体が、自然界に存在すると思いがちだ。それが「思想」にすぎないこと、それがきちんと腑に落ちれば、われわれは科学の呪縛から解き放たれるのかもしれない。(はしづめ、だいさぶろう「東工大助教」)

読

現代を知る書物の饗宴 入門のためのブックガイド

難しいイメージが強い哲学を何とか分かりやすく伝えられないか。そう考えた多くの学者が苦闘してきた。80年代半ば以降に出版された中から、**新書・文庫を中心に10冊選んだ。**

編集部 橋元信一 写真 久保田裕哉

わかりたいあなたのための『現代思想・入門』



80年代半ば、ポスト構造主義を代表する著者『構造と力』がベストセラーになったのをきっかけに、現代思想ブームが起きた。当時、雑誌『別冊宝島』の編集長をしていた石井慎二さんは考えた。「構造主義もわからんのに、ポスト構造主義なんてのが出てきたとは大変だ。そんな読者の置きが、こんな難解な本が20万部も売れる異常にある。思想の流れをもっと分かりやすく解説すれば、まあ1冊の2万人は読んでもいいだろう。若手研究者らによる平易な文章に図解を多用した特選号は、90年に改題出版した分も含めて20万部を超え、続編(日本版)も10万部を越した。「思想ブームは終わり、ポスト構造主義も自壊した感だが、それ以前に達した思想が出てきていないから、この本もまだまだ売れそう」と石井さん。

哲学 本

『新哲学入門』 廣松渉 岩波新書 550円

目次の項目の字数がビクビクとできている。超密な理論構成、難解な言い回しで知られるマルクス主義哲学研究の第一人者が、4年前に初めて書き下ろした入門書だ。「入門書は、書いていて地獄になるからな」といふながら、このあと『哲学入門一歩前』(講談社現代新書)も出版。幅広い読者を「哲学研究者の場に案内する」姿勢を鮮明にした。認識論、存在論、実践論の3章からなる構成は、体系的著作全3巻『存在と意味』がまだ第1巻の認識論しか出ていない現状では、実践論の素地を見ることができるところで貴重。

『はじめての構造主義』 橋爪大三郎 講談社現代新書 600円

『現代新書』は、東京オブリックの年々4年に刊行された。講談社学芸部第一出版部の何部発刊部長は「読者の期待がアカデミック、中公新書が歴史中心なのに対し、なるべく各層の読者を考える種を撒いている」という。哲学・思想関係が多い中で、最もヒットしたのが、この本だ。初版後4年で8万3000部。何とんでもない数字だ。著者は「最近ポスト構造主義が主流だけど、その前の構造主義、その生みの親であるレヴィ・ストロースを理解しましょう」という呼びかけも読みやすさにつながった。

『環境倫理学のすすめ』 加藤尚武 丸善ライブラリー 640円

昨年暮れに出版された『環境倫理学』が環境倫理が深奥になるのに対し、現代哲学・倫理学に何が出来るのか。現代、哲学者が中心になってアメリカで生まれた「環境倫理学」の考え方を初めて日本に紹介する役割を果たしながら、現実問題を前にした哲学の可能性を考えていく。同じ著者の『バイオエシックスとは何か』(未來社)を併せて読むと、バイオエシックス(生命倫理学)と環境倫理学という、現代社会と哲学・倫理学の関係、著者の思考が見えてくる。

『現代思想の冒険』 竹田青嗣 ちくま学芸文庫 680円

著者は、全共闘世代の多岐多岐な明治学院大教授。肩書は文芸評論家だが、在日朝鮮人として民族差別論を頂戴した。井上靖水論を書いたり、カラオケでプロ並みの声を出したり。友人との熱意で理解を深めてきた哲学・思想の分野でも、「自分を知るための哲学入門」(ちくまライブラリー)など著書が多い。この本は、87年に毎日新聞社から出版され、8月に文庫になったばかり。「ひまどと横断のある人間は入れないような世界に見える哲学を、いつでも誰でも手元でできるようにしたい。との思いが伝わる。

『近代をどうとらえるか』 三島憲一 河合ブックレット 520円

大手予備校、河合塾の「文芸春秋」の講座がブックレットになって発売されている。今村に『思想の現在』(河合塾)、『書寫・文化・無意識』(河合塾)、『ファッションという読書』(河合塾)など、河合塾文化研究所発行。この本は、近代に入ってから世界大戦、ナチス問題をはじめて「人間が経験した恐怖」が増え、近代を肯定しとらえる理論が少なくなったことを指摘したうえで、近代批判のパターンを6つに分け、それぞれの問題点を明快に語っている。そして「近代を全体として、しかも高飛車に語るのやめよう」と提案する。

『術語集』 中村雄二郎 岩波新書 550円

哲学の新書では、この人、1977年の『哲学入門』(中公新書)に始まり、近く中国語訳が『哲学の現在-生きることと考えること-』(岩波新書)、今年の『自由の知とは何か』(河)など、それぞれ評判が良いが、『アイデンティティ』『遊び』といった現代思想のキーワード40を選び、精選用語をさらに加えて、5冊ずつ解説したこの本は、言語の問い直しに現代哲学の潮流となる中で、後にあがる今村さんの本に通じるものがある。どこからでも読めるのが、便利。

『続・哲学の冒険』 内山節 毎日新聞社 1300円

竹田さんの本の最初の巻頭語「毎日新聞の佐々木清昭さんは、西洋の哲学書、内山さんの本を何冊も読んで、自分を育ててくれた編者さんが定年退職する前の最後の仕事。その思いがこの本にある種の道力を持たせている。高校卒業後、山村生活の中で哲学で生きてきた著者は「哲学は、基本的に私小説と同じ」が特徴。学生反乱の「後編時代」という時代を背景に、高校生だった自分がかつて哲学を学んだかを描いていく。中学生読者を想定した前置詞の続編だが、一人の哲学少年の「私小説」の中に、近代哲学から近代批判、そして近代への「哲学の冒険」が描かれ、現代哲学の流れも浮かび上がる。

『現代思想のキーワード』 今村仁司 講談社現代新書 600円

これも、よく読まれている。85年秋の初版で、いま11刷。著者は、社会学・社会思想史を専攻する東京経済大教授。「現代日本を代表する思想家になりつつある」との評もあるほどで、フランスではじめとされる現代思想に広く通じ、その核心となる問題に徹力に切り込んでいる。この本は、そうしたふところの深さ、原典の読みゆかさを土台に、やさしい言葉で「現代思想の大きな取組」を描く。流行にとらわれず新出したキーワードを有難く関係づけて配置し、説明していった先に、著者がこだわっている「力」を考へる。世界が持つ構成。中身が濃い。

『現代の哲学』 木田元 講談社学術文庫 720円

文庫になったのは昨年だが、現代思想の大学書の一つとして出版されたのは23年前、大学が大規模に原典を出版した年のことだった。そんな古い本をなぜ取り上げるのか。80年代に出たが、支持派にしても批判派にしても、多様な広がりを持つポスト構造主義の影響が色濃くのびるに比べると、構造主義以前の哲学しか視野に入っていない。この本の方が、現代思想の姿が見えやすい面があるからだ。特に今世紀初頭の知覚状況が分かりやすい。著者にとっては拙作。文庫版あがきで「いかに若書きといったらいいか」と目立つと自覚しているが、それがまた「時代の空気を」感じさせる。